



文明開化と
日本の想像

桶谷秀昭

福武書店



桶谷秀昭（おけたに・ひであき）

一九三二年、東京に生まれる。一橋
大学社会学部卒。著書として『土着
と情況』『近代の奈落』『凝視と彷徨』
『夏目漱石論』『ドストエフスキイ』
（平林たい子賞受賞）『中野重治』『保
田興重郎』（芸術選奨受賞）『葉亭四
迷と明治日本』などがある。

文明開化と日本の想像

一九八七年一月一〇日第一刷印刷

一九八七年一月一六日第一刷発行

定価三三〇〇円

著者 桶谷秀昭

発行者 福武總一郎

発行所 株式会社 福武書店

東京都千代田区九段南二―三―二八

〒三三〇電話〇三―三三〇―二三三―

振替口座（東京）六一〇五〇九七

本文印刷 大日本印刷

平版印刷 栗田印刷

製本所 加藤製本

（落・乱丁本はお取替えいたします）

文明開化と日本の想像——目次

『東西南北』の周辺——鐵幹と透谷

7

『紫』と『みだれ髪』

31

厭世主義の諸相——高山樗牛の轉向

83

二十世紀初頭日本——夏目漱石・幸徳秋水・高山樗牛

101

神々の黄昏——岡倉天心とラフカディオ・ヘルン

147

生田長江

ひややかにみづをたたへて

188

文藝の批評家

206

マルクス主義と超近代主義

223

佐藤春夫

述志と殉情

248

無常美感

268

時局と文学

284

萩原朔太郎

近代病

310

風なき野道

330

新しき弁証の彼岸

348

『夜明け前』

歴史の奥の歴史

亡びゆく父たち

395 374

『死者の書』

419

装丁 田村義也

文明開化と日本の想像

『東西南北』の周辺——鐵幹と透谷

明治二十七年五月十日から十八日まで八回にわたつて「二六新報」紙上に、與謝野鐵幹は、「亡国の音」といふ題名で激しい論争的性格の歌論を書いた。「現代の非丈夫的和歌を罵る」といふ副題がこの歌論の激しい挑戦的な性質を率直にあらはしてゐる。

鐵幹はその二年前、京都の父の家を飛びだし、上京して落合直文の門下生となり、そのつてで「二六新報」に入社して、編輯から大組みまでひとりて担当してゐた。明治二十七年、かぞへ年で二十二歳になつてゐた。

古人の言に云く「文章の世道に関せざるもの工なりと雖も何の益かあらむ」と、余は和歌に於ても常に此言を服膺する者也、

「亡国の音」の冒頭にかう書いたとき、鐵幹は文学と時勢との対応関係といふことを念頭に置いてゐた。萎靡繊弱な文章は衰世にあらはれ、雄大華麗な文章は盛世に、豪宕悲壯な文章は乱世にあらはれる。彼はそれぞれの文章に王朝、奈良・江戸時代、鎌倉・南北朝の時勢の性格を考へてゐる。世はそれにふさはしい文学を生むが、この逆もまた真で、文学はそれにふさはしい世を生む。そして世の衰へるのも盛んになるのも、国家の衰亡、興隆にひとしい、と極く自然に考へた。

かういふ発想法は、鐵幹ひとりのもものではなかつた。この時代、それはナシヨナリズムといふ概

念で呼ぶのも適當でない、個人と家族を超えた視界に関心が拡がり、そこに人が志をみいだすときの思考と感情の自然な水路であつた。それは一義的な限定に収まりきれない、何か茫漠とした、夢のやうな思念である。

文学の衰退、興隆と、国家のそれとが密接不離であることを語つてゐながら、思念はさらに国家を超えて、「宇宙」に容易に膨張する。

大丈夫の一呼一吸は直ちに宇宙を吞吐し来る、既にこの大度量ありて宇宙を歌ふ宇宙即ち我歌也、「宇宙即ち我歌」といひきるところに、すでに後年「明星」第六号から掲げた「新詩社清規」の一カ条に「われらは詩の内容たる趣味に於て、詩の外形たる調諧に於て、ともに自我独創の詩を築むなり」とうたつた主張の片鱗がみえる。「亡国の音」が「二六新報」に連載発表されてゐたとき、五月十六日の払暁、北村透谷が芝公園地の紅葉館の裏手にある借家の庭先で縊死自殺を遂げた。透谷は鐵幹より五歳年うへで、二十七歳であつた。

透谷は前年の春、徳富蘇峰の民友社から出す予定の書き下ろし評伝『エマルソン』を脱稿したあと、短刀で咽喉を突いて自殺を図つたが、死にきれず、傷が癒えたあとも、「我が事終れり」といつて二度と筆を取らなかつた。年を越して、四月に『エマルソン』が発行され、民友社から届いたその一冊を手を取つたが、頁をひらいてみる氣力がなかつた。

鐵幹は透谷の死を聞いて、「詩友北村透谷を悼む」の詞書をもつ哀悼の一首を作つた。

世をばなど、いとひはてけむ。詩の上に、おなじこゝろの、友もありしを。

五、七各句ごとに句読点を打つた三十一文字の詩型は、鐵幹の意識では、伝統的な和歌のジャンルにたらなるものではなく、短詩と呼ぶべきものであつた。

鐵幹はこの五歳年うへの新体詩人を尊敬してゐた。二年まへの明治二十五年の十二月、上京して匆々に落合直文の門に入るとほとんど同時に、「青年文学・鳳雛」を創刊した。野心家で機敏な鐵幹の素質がかういふすばやい行動にあらはれてゐる。しかし、この雑誌は第一号を出したただけであつた。

「青年文学・鳳雛」創刊号に鐵幹は透谷に寄稿を依頼したところ、「風流」と題する短文、といふより痛烈なアフォリズムを送つてきた。

何をか風流と云ふ、吾之を疑ふ。錦の衣着て、栗毛の駒に跨りたるが風流か、破れたる襪襪纏ふて、街頭に立つが風流か、琴の手面白く、筆取りて歌など書くが風流か、胸に楽調なく、思を語る事も知らぬ田夫野郎が風流か、……

かういふ調子で、通念としての風流の具體的形姿とそのアンチテーゼを、聯想の赴くままに書きつらねてきて、次のやうに結ぶ。

……天地果して風流と云ふ者有りや無しや、吾之を山中の老僧に問ふ、老僧笑うて答へず、適歩下に輾轉する一蚯蚓あり、指点して云く、風流是哉。

風流の通念とその反動としてのもう一つの風流観念をつぎつぎと繰り出してきて、最後に地にのたうつみみずのデモオニッシュな姿を、ぎろりと突きつけてどんでん返しをおこなふ。その果敢な弁証法といふよりイロニイの効いた潑刺たる文章を、鐵幹は記憶してゐたにちがひない。

「亡国の音」で、宮内省御歌所の歌人高崎正風の歌を、語調はなめらかだが、品格は野鄙で構想は卑俗だと槍玉に挙げることから、その具體的なポレミックを展開した鐵幹にとつて、透谷は、「詩の上に、おなじこゝろの、友」であつても不思議でなかつた。

しかし、「世をばなど、いとひはてけむ」といふ上二句の問ひかけは、鐵幹と透谷の距離を期せずしてあらはしてゐる。厭世詩家透谷の心は、覇氣満々の野心兒鐵幹の手の届かぬところにあつた。鐵幹は「亡国の音」のをはりの方で、歌人が恋歌を歌の真髓だと思ひこみ、百人一首、伊勢物語を模倣した情歌を作つて得々としてゐるのを攻撃してゐる。

……而して醜聞は往々妙齡歌人の間に起る、世に風俗を壊乱するものあらば余は此「恋歌」を以て其一に加ふるを躊躇せざるべし、(中略)あゝ、「亡国の音」われ妄りに罵る者に非ず、

皮肉なことには、これと同じやうな罵言が七年後、「明星」の妙齡歌人鳳昂子と妻子もちの鐵幹との恋愛にむけて降りかかつてくるのを、当の鐵幹は予想もしてゐなかつたであらう。なるほど、女の腐つたやうな男の歌人と恋愛きちがひみたいな女の歌人同士が、この世は男と女の仲以外に何もないかのやうな顔をして、恋歌を詠んでゐる凶などは、鐵幹ならずとも、虫酸が走る思ひがしないわけではなし。

しかし、このとき鐵幹は、明治二十五年一月の「女学雑誌」に透谷が発表した『厭世詩家と女

性』を知らなかつたのであらうか。透谷は、そこで、理想家が現世とのたたかひに不可避に陥る一敗地の意気沮喪した状態で、なほ彼をこの現世につなぐものがただ一つあるとすれば、それが恋愛である、といつてゐる。厭世家が抱く幻想の投影を可能にする最後の場が、恋愛といふ「想世界の牙城」であるといひ、そこでは現実社会の弱肉強食の闘争と自己本位の競争から生ずる不調和とはさかしまの、自己犠牲と自他の澄んだ認識にもとづく調和が実現するといつて、恋愛の思想的根拠と社会的な意味づけをおこなつた。

鐵幹は透谷の立論の背景にある體驗にまだ思ひいたらなかつたであらう。もしも『厭世詩家と女性』を鐵幹が読んでゐたとしても、透谷の厭世感が恋愛といふ心の経験にいたる過程を、実感として掴むことができなかつたのであらう。鐵幹が共感を抱いたとしたら、恋愛といふ心の経験を、なよなよとした和文脈ではなく、決断し、明確な思念の輪郭をとみなふ漢文脈で述べてゐる、透谷の丈夫的氣風に対してであつたらう。

いひかへれば、それは『蓬萊曲』の透谷ではなく、『楚囚之詩』の透谷への共感であり、その文體に痕跡を留めてゐる浪人的、壯士的慷慨への反応であつたらう。明治十年代の後半、民権壯士の群に身を投じ、爆裂弾を携へて朝鮮に渡るといふ大井憲太郎の一群に近いところにゐた透谷の野心と情熱は、明治二十七年の鐵幹が共有するところのものであつた。しかし、透谷よりも五歳若い鐵幹になくて透谷にあつたものは、自己と自己を超えたより大いなる存在への意識、たとへば宇宙であれ神であれ、さういふ存在とより小さな制限の中に生きてゐる自己との意識、無限の中に位置づけられてゐる有限の自己意識であつた。

浪漫主義者透谷の中には、さういふ古典的氣質が最後までこのこつてゐた。

悲しき Jimi は人間の四面に鉄壁を設けて、人間をして、或る卑野なる生涯を脱すること能はざらしむ。
〔『人生に相渉るとは何の謂ぞ』〕

然り、人間の歴史は多くの夢想家を載せたりと雖、天涯の歴史は太初より今日に至るまで、大なる現実として残れり。
〔『一夕観』〕

透谷にあつた古典的氣質からよくも悪くもふつきれてゐた鐵幹は、何のためらひもなく、「大丈夫の一呼一吸は直ちに宇宙を吞吐し来る」と朗々といふことができた。彼の浪漫的氣質は、無限の自己膨張をもたらし、大仰な身振りで日清戦争前後の時代の声にその声調をのせることを可能にした。

二

明治二十九年に世に出た鐵幹の処女詩歌集『東西南北』が、当時よく売れ、反響の大きかつた割合に、後世の読者の眼に未熟、粗笨な作品の寄せ集めにみえるのは、弁明の余地のない事実である。全篇これ壯士風の大言壯語と稚氣の無秩序な放出といつてもいひすぎではあるまい。尤も鐵幹自身が作品の完成といふことを意に留めてゐなかつたとしたら、さういふあげつらひをいくら重ねても仕方がない。そんな印象の詩歌集である。現に鐵幹が自序で先まはりしていつてゐる。

本書は、得るに従ひて、編輯せしもの。前後の順序もなく、聯絡もなし。小生の、万事に疎放なること、今に改らず。御推恕を願ひ候ふ。

小生は、詩を以て世に立つ者にあらず候へども、短歌にもあれ、新體詩にもあれ、世の専門詩人の諸君とは、大に反対の意見を抱き居る者に御座候ふ。

しかし、「前後の順序もなく、聯絡もな」いのは、たしかにその通りなのであるが、それは作者の天性が「疎放」のためではなく、意識的に順序を攪拌したのではなからうか。『東西南北』の中心ははじめて韓国に渡つた明治二十八年と二度目の渡韓の二十九年春の時期の作品群であることは疑ひやうがない。しかしその中心に位置する作品群をばらばらにして、時間の順序を無視するのはやうに、二十五年から二十七年にかけての作品の中に投げ込んでさらにもう一度攪きまはしたのではないかと疑はれる。かういふ意識的攪拌操作を、性疎放な浪人豪傑風のポオズによつて隠してゐるのではないか。

そしてさらに、「小生は、詩を以て世に立つ者にあらず」といひながら、専門詩人の抱く文学観とは別の文学観を抱いてゐるといふ自負を洩らす。

疎放のポオズの下に細心を隠し、卑下の言辞を傲然たる自負によつて斬り返す。さういふ戦略を効果あらしむるために、井上哲次郎、落合直文、鷗外から子規、斎藤緑雨、佐佐木信綱にいたる、新體詩、歌界の先輩師友の序文を掲げ、題字に韓国の開化派の亡命政治家、兪吉潐ユキシク、趙義淵チョウギエンをわづらはすなど、そこに感じられるのは、孤独な詩人の含差をともしなふ登場とはうらはらの、騒々しい、チャアナリステックなあらはれかたである。

しかしそれが、日本と朝鮮を股にかけ東西南北に奔走する志士の、肉體行動で描いた詩の浪漫的雰囲気をもつての神話にまでもたらさうとする意図を、かなりの程度まで実現してゐることはたしかである。もしもこの詩集が、尋常の配慮によつて作品の年代順に配列編輯されてゐたら、印象はかなり違つたものになつてゐたであらう。